

読書推進運動


 公益社団法人
 読書推進運動協議会
 〒162-0828
 東京都新宿区袋町6
 日本出版クラブ会館内
 TEL 03(3260)3071
 FAX 03(5229)1560
 発行人 宮本 久
 編集人 片岡 伸子
 定価 60円

No.602

- ★「絵本ワールド」各地で開催(2・3頁)
- ★「赤い鳥」創刊100年記念事業(5頁)

会員の購読料は
会費の中に含まれる

年頭所感

第60回「こどもの読書週間」にむけて

公益社団法人 読書推進運動協議会 会長
 株式会社 講談社 代表取締役社長
 野間省伸

野間省伸



あけましておめでとうござ
います。

本年は「こどもの読書週
間」が第60回の節目の年にあ
ります。これまで4回「こ
どもの読書週間」にポスター
イラストを提供していただい
ている絵本作家の荒井良二さ
んに、第60回のためにイラスト
トを描き下ろしていただきま
した。

色鮮やかで力強いイラスト
を公開して広く標語を公募
し、先日開かれた事業委員会
において、2018年の第60
回「こどもの読書週間」の標
語が「はじまるよ！本のカー
ニバル」に決定しました。

このポスターは4月23日か
らの「こどもの読書週間」に
あわせ、全国の読書推進運動
協議会さまを通じて公共図書

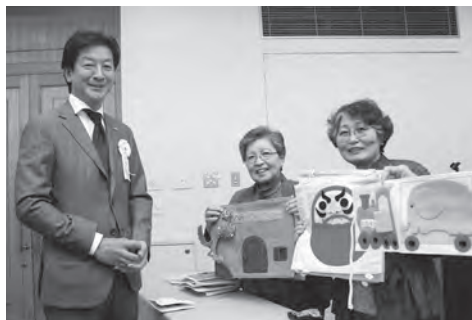
館に、日本出版取次協会さま
を通じて書店に、そして、全国
学校図書館協議会さまより学
校図書館へと配布されます。

このように、読書推進運動
協議会が「読書週間」や「こ
どもの読書週間」などの事業
を長きにわたって続けられて
きたのも、出版界、読書界の
みなさまの協力があつてこそ
であり、あらためてお礼申し
あげます。

全国各地で長年読書推進活
動に取り組んでこられた読書
グループの方々に「野間読書
推進賞」として顕彰させてい
ただいておりますが、現在ま
でその数は団体と個人あわせ
て218となりました。読書環境
激変の時代に、学校、地域、
家庭をつなぐ草の根の読書推
進活動はますます重要になつ

てまいります。贈呈式でうか
がう受賞者のみなさまのおは
なしは心強く、私たちの活動
を進める力となります。

一昨年の第70回「読書週
間」では、みなさまのご協力
のもと数々の記念事業を開催
することができました。いま
から70年前、戦火の傷跡がま



だいたるところに残っている
1947年に「読書週間」が
スタートしたときの理念は
「読書ので平和な文化国家
を」というものでした。自由
に本を作り、自由に本を読め
ることは平和の基礎です。出
版界と読書界が協調して読書
活動を推進するにあたって、
平和な文化国家をめざすとい
う本来の理念を忘れぬかぎ
り、私たちの活動の軸が変わ
ることはありません。

新しい年のみなさまのご多
幸とご健勝を心よりお祈りし
て、新年のご挨拶とさせていただきます。

■2017年度読書推進運動協議会全体事業委員会

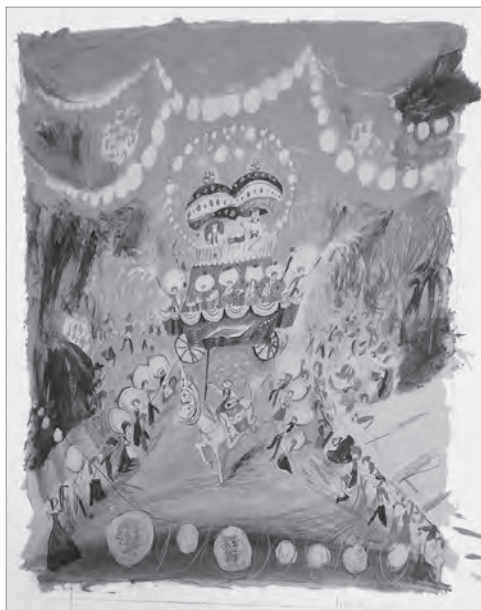
「読書週間」ポスターイラストの応募 数や周年企画の内容などを提案討議

2017年12月15日(金)、東京都新宿区の日本出版クラブ会館で公益社団法人読書推進運動協議会の2017年度全体事業委員会が開催され、「読書週間」「こどもの読書週間」などの協議会の柱となる各事業について協議された。

標語の決定時期が早くなった影響からか、2016年に応募数が減少した「読書週間」のポスターイラスト募集について、2017年は関係各方面からの意見をいただき対応をし、その結果行った、

公募サイト、美術専門学校、イラストレーター団体への協力依頼などが功を奏し、応募数が例年なみに戻ったことなどが、事務局より報告された。それを踏まえて、今後も標語の決定後にイラストを募集し、ポスターを制作していく方針が確認された。

2018年の第60回「こどもの読書週間」記念事業は、荒井良二さんの描き下ろしイラストと標語をデザインしおしり80万枚を作り、全国の書店・図書館に配布す



第60回「こどもの読書週間」ポスターイラストは荒井良二さんの書き下ろし!



2017年度に発行したポスターとリーフレット

ることなどが提案討議された。そのほか、事業委員からは、「子どもの読書週間」に関する記念の展示などができないか、各方面への働きかけをしようか、などの意見も出された。

そのほか、「敬老の日読書のすすめ」「若い人に贈る読書のすすめ」事業も、例年同様に進めていくことが確認された。

また、2019年の読書推進運動協議会創立60周年記念事業について、2019年3月に刊行を予定している「2019年全国読書グループ総覧」に、読書グループ研究や読書推進運動協議会60年の総括などの寄稿を追捕し、記念号とすることなどが提案討議された。

■「絵本ワールドinにいがた2017」

地元大学やボランティアの協力で さなざまなワークショップが開催

2017年11月19日(日)、新潟県新潟市の朱鷺マッセで「絵本ワールドinにいがた2017(主催「新潟日报社」が「福祉・介護・健康フェア」と同時に開催された。

一昨年の復活開催から3連続の開催となった。

絵本作家の黒井健さんは「えほんの絵について」と題した講演

で、自身の出身の新潟から上京して現在の絵本作家になるまでの経緯と、作品に対するこだわりについて語った。また、丸の下に台形をつけただけのシートを会場に配り、どこにどんな線を描き足して

いけば、かわいい動物に変化していくかを解説。お絵かきの基本を会場の親子にレクチャーして講演を締めくくった。

新潟市在住のイラストレーターあだちあさみさんのワークショップ「なにができるかな? わくわく石ころアート」も人気で、大いに盛りあがった。

また、地元新潟大学の協力で、毛糸と小枝で作るクリスマス飾り、切り紙で作る雪の結晶コースター、バルーンアート、コロコロめいる工作などのワークショップが催された。地元グループによるワークショップも数多く行われ、松ぼっくりのクリスマスツリー、紙コップロケット、牛乳パックで作るエコフリスビーなどの工作に子どもたちが取り組んだ。

ほかに、12の地元のグループによる読み聞かせや紙芝居ライブなどが数多く催された。同時開催の「子どもの本大展示」では、新潟書店商業組合の協力のもと集められた絵本も人気で、来場者の親子がお気に入りの一冊を求めた。



黒井健さんの講演会ではお絵かき教室も!

■絵本ワールドinわかやま2017

絵本作家9名が講演・ワークショップ・ライブペイントに大活躍

2017年11月11日(土)、12日(日)和歌山県有田郡の有田川町地域交流センターALECで「絵本ワールドinわかやま2017(主催) 絵本まちづくり協会」が、「えほんマルシェ」と同時開催された。

有田川町を絵本の町として活性化しようとした「えほんマルシェ」は絵本作家の講演会やワークショップ、サイン会などの絵本ワールドと、絵本の展示販売や地元の人気飲食店や小物ショップ約20店がテント出展する市場(マルシェ)からなるイベントで朝一番から会場は大いににぎわ



子どもの本即売会では、子どもたちが熱心に本を選ぶ姿が

い、大阪からの来場者もいるほど。

参加した絵本作家は、「有田川町絵本コンクール」の審査員でもある宮西達也さん、Iupera Iuperaの亀山達矢さんと中川敦子さんや加藤藤ミさんなど9人となった。恒例のALECのガラス壁面へのライブペイントのほか、今年は旧有田川鉄道御霊駅の駅舎にもライブペイントを行った。カラフルなキャラクターたちで彩られた駅舎により有田川鉄道跡地道路は、絵本の町のシンボルロードとなった。

11日は平田昌広さん・景さんによる「夫婦ライブ」。新作の『いぶくろちゃん』などを来場者をまきこんで読み聞かせした。浦中こいういちは紙皿の絵が変わるし

かけを「紙皿シアターライブ」で解説。子どもたちとともに紙皿に絵を描き、その絵を動かしてショーを完成させた。

12日はIupera Iuperaのおふたりの「おはなし会」。『やさいさん』『うんこしりとり』などを来場者と声をあわせて読み聞かせし



参加した絵本作家が勢揃いして御霊駅駅舎でライブペイント!

た。宮本えつよしさんは『レンタルおぼけのレストラ』の読み聞かせのあと、「ペットボトル工作」のワークショップを開催。ペットボトルで実際に動く犬や船をみんなで作った。宮西達也さんは『おかあさんだすきだよ』などの自作の絵本を、今回参加した絵本作家のみなさんをつぎつぎに舞台上上げて、一緒に読み聞かせした。

また、会場では両日を通じて山本孝さんの「忍者つばめ丸修行道場」が開催された。来場の子どもたちは、忍者なりきりアイテムを自分で作り、ゲームを楽しんだ。

参加絵本作家の講演会のあとにはサイン会が開催され、来場の親子がお気に入りの絵本を手に長い行列を作った。

■「絵本ワールドinとっとり2017」

書店、学校、地域一体で開催、16年目は県央の倉吉市で

2017年11月18日(土)、19日(日)、鳥取県倉吉市の鳥取看護大学・シ

グナスホールで、「絵本ワールドinとっとり2017」子どもにはえほん大人にも絵本(主催) 新日本海新聞社、共催) 同実行委員会、鳥取看護大学・鳥取短期大学」が開催された。

鳥取県の絵本ワールドは2002年から東部・中部・西部と順番に毎年開催されており、16回目の今回は県央の倉吉市で開催された。

「おはなしの部屋」「あそびの部屋」「大きな家を作ってみよう」



倉吉市で活躍するボランティアグループえ本の会「泉」の読み聞かせ

などのワークショップは地元グループの協力で行われた。

18日には作家生活30周年をむかえた児童文学作家のくすのきげのりさんが「ひとりひとりがみんなたいせつ」と題して講演した。最新作の読み聞かせを交えて、想像する力、共感する力の大切さを語った。

美術家の村上慧さんは「家をおって歩くについて」と題し、発泡スチロールで作った、まさに家をせおって全国に移住して生活するプロジェクトについて語った。会場の子どもたちから斬新で鋭い質問が飛びユニークな講演会となった。

19日は絵本作家の平田昌広・景夫妻による「まつさんとけいちゃん」の絵本ライブ。昌広さんの語りにあわせて景さんが即興で絵を描き、会場を巻き込んで楽しいライブを繰り広げた。

同時開催の「えほんがいつぱい」には1万冊の絵本が展示即売され、来場者はお気に入りの一冊を求めた。

■国際子ども図書館・日本ペンクラブ講演会

多様な文化と共存するカナダの 児童文学を紹介

国立国会図書館国際子ども図書館と、日本ペンクラブが共催する講演会「シリーズ・いま、世界の子どもの本は? (第10回)」が、2017年11月18日(土)に開催された。10回目となる今回は、白百合女子大学人間総合学部児童文化学

科教授の白井澄子さんによる「いま、カナダの子どもの本は?」。今年、建国150周年を迎えるカナダは、先住民の文化、フランス語圏の文化、英語圏の文化が存在する、多様性に富んだ国であるため、子どもの本の全貌をつかむことは

むずかしい。今回、白井さんは英語の本にしぼり、黎明期からの歴史と、2010年〜2017年に「カナダ総督児童文学賞」を受賞した作品を紹介した。

白井さんによると、『シートン動物記』や『赤毛のアン』の印象が強いカナダの児童文学だが、2000年ごろより、先住民をテーマにしたものや、心に傷を負った若者たちの姿をリアルに描くものが増えるなど、いまのカナダらしさがでてきている。これまでタブーとされていた先住民への同化教育(レジデンシャルスクール)の問題を正面からとらえた作品が存在感を強め、また、難民など国際的な弱者をテーマとする作家 デボラ・エリスが活躍するなど、文化や民族の多様性を受け入れ、共生を探る作品が生まれる流れは、これからも続くと思われるという。

一方、世界的に人気の高いファンタジーは、出版点数が少なく、国内の賞を取ったものもほとんどないなど、意外な一面も紹介された。



多様な民族・文化との共生を探るカナダ児童文学の魅力を語る白井さん

■JBBYが新しい支援活動を開始

困難に直面する子どもたちに 本で希望を灯す!

日本国際児童図書評議会(JBBY)は、日本国内の困難な状況にある子どもたちに、子どもの本を通じた支援活動「JBBY希望プロジェクト」を開始した。

JBBYではこれまで、他団体と協力して、東日本大震災で被災した子どもたちへの支援活動「あしたの本プロジェクト」を実施。岩手県陸前高田市の子どもの図書館「にじのライブラリー」の運営、宮城県気仙沼市・石巻市での図書館バスの運行、福島県南相馬市の子どもたちへの図書寄贈などを行ってきた。「あしたの本

プロジェクト」の終了後、その経験と反省をもとに立ちあげるのが、「希望プロジェクト」となる。「希望プロジェクト」では、災害、貧困、暴力、放射線被害などさまざまな困難と隣りあわせて生きている子どもたちが、本で希望の火を灯せるよう支援をする。支援の対象は、日本国内の困難を抱える子どもたちと、その子どもたちを支える団体とし、希望者からの要請を受ける形で支援する。具体的には、困難を抱える子どもたちの居場所へ本を送る、子どもたちの居場所による出張ワークショップなどが予定されている。

そのほか、支援希望者の意見を聞きながら、内容を充実させていく予定。

プロジェクトの一環として、いま子どもたちがおかれている状況や、抱えている問題について学ぶ「学びの会」も、東京で開催される。

①2017年12月3日「心を開く読みあいの力」村中李衣さん

②1月27日「子どもの成長とメディアー大人になれない子ども



「学びの会」で絵本の読みあいを紹介する村中李衣さん

たち」田澤雄作さん

③2月18日「詩が開いた心の扉 奈良少年刑務所での試み」寮美千子さん

④3月3日「原子力災害が福島の子に与えた心理学的影響の研究がとらえた事実」筒井雄一さん
(参加には事前の申し込みと参加費が必要)

支援希望の申し込み、学びの会の会場とスケジュールなど、詳細はJBBYまで。また、JBBYではこの活動への支援と寄付を募っている。

●JBBY

Tel 03-52228-0005-1

Tel 03-52228-0005-3

e-mail kibou@jby.org

ホームページ

<http://www.jby.org>



東京都豊島区「椎名町子ども食堂」を訪問して本をプレゼント、読み聞かせも実施

■雑誌『赤い鳥』創刊100年記念事業

日本の児童文学100年のお祝いに 大人も子どももご参加を！

日本児童文学者協会 副理事長 藤田のぼる

今年2018年は、大正期の童話童謡雑誌『赤い鳥』が創刊された1918(大正7)年から数えて、ちょうど100年になります。日本の児童文学は、1891(明治24)年の『こがね丸』を起点にするのが通説ですが、こうした巖谷小波を代表とする「お伽噺」の通俗性に飽き足らず、芸術としての童話・童謡をと、『赤い鳥』を創刊したのは、作家の鈴木三重吉でした。その2年前に、三重吉が長女すずを得、この子によい読みものをとというのが契機となったこと

はよく知られています。ちなみに、すずさんは、その後服飾デザイナーとして活躍され、先年98歳で亡くなられました。かつて赤い鳥賞の贈呈式の場合、弟の珊吉さんとともに元氣なお姿を見せていらしたことを、ご記憶の方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

さて、その『赤い鳥』創刊100年が近いことは、数年前からぼくも意識はしていました。赤い鳥賞を主催していた『赤い鳥の会』が元氣であれば、記念事業の中心になったはずです。赤い鳥の会は、1971年に、雑誌『赤い鳥』の精神を世に再びアピールしようとして、同誌で作家としての地歩を築いた坪田譲治、画家の深沢省三、そして鈴木すず、珊吉、北原白秋の長男 隆太郎氏といった関係者によつて結成され、坪田門下の前川康男、今西祐行、松谷みよ子、砂田弘といった作家たちで、活動が続けられていました。しかし、これらの方たちがみな鬼籍に入り、赤い鳥賞も終了を余儀なくさ

れていました。

こうした折、鈴木珊吉氏のご長男の潤吉氏からの積極的な働きかけもあり、日本国際児童図書評議会(JBBY)、日本児童文学者協会、日本児童文学者協会、そして赤い鳥の会の4団体で記念事業実行委員会を結成することにしたのが、一昨年末のことでした。ぼく自身は当初、講演会やシンポジウムといったイメージでしたが、せっかくの『赤い鳥』100年であり、子どもたちも参加できるイベントがほしいという話になり、同誌の掲載作品を課題とした感想文コンクールも行うことにしました。

話が前後しましたが、創刊号には芥川龍之介の『蜘蛛の糸』が、その後も有島武郎の『一房の葡萄』など多くの文壇作家も作品を寄せ、また一度の中断を経た後期『赤い鳥』には、当時まだ18歳だった新美南吉が投稿した『ごん狐』が掲載されています。つまり、『赤い鳥』創刊100年ということは、日本の児童文学のいまに続く歩みが

(先に書いた明治期の児童文学は、作品自体が読み継がれてはいないので) ようやく100年を迎えるというところもあるわけです。

さて、感想文コンクール(「小学生の部」と「中学生以上・一般の部」があり、それぞれ課題作品5点が設定されています)のほか、実行委員会の企画には、次のふたつのイベントがあります。

●記念講演会

5月5日(日)午後1時半から会場「国際子ども図書館(3/5日開催の「上野の森親子ブックフェスタ」の一環) 内容「関口安義『赤い鳥』と芥川龍之介」、遠山光嗣『赤い鳥』と新美南吉」ほか

●朗読とシンポジウムの集い

9月23日(日)午後2時より 会場「神奈川近代文学館ホール 内容「朗読(山根基世)、シンポジウム(佐藤宗子・矢崎節夫・松本育子・宮川健郎)」

さらに、全国の文学館・記念館などからも、『赤い鳥』100年への関心が寄せられています。北は北海道ニセコ町の有島(武郎)記念館、南は福岡・柳川の白秋記念館や大分・竹田の佐藤義美記念館など、『赤い鳥』ゆかりの文学施設はかなりの数にのぼります。こうした記念館などと『赤い鳥』100年連

絡会」を結成し、連携を図っています。5月の講演会場でもある上野の国際子ども図書館では、秋から『赤い鳥』関連の展示がはじまりますし、新美南吉記念館などでも関連展示の開催が決まっています。これらの詳細については、実行委員会各団体のホームページで随時紹介していきます。また、『赤い鳥』の大きな柱である童謡については、日本童謡協会が7月に記念コンサートを企画しています。これらのさまざまな動きも含めて、『赤い鳥』100年と記念事業を告知するための冊子を、各出版社のご協力も得て、且下製作中です。3月末までに発行、あわせてポスターも作り、全国の文学館やおもな図書館などにお送りする予定です。



芥川の『蜘蛛の糸』が掲載された記念すべき『赤い鳥』創刊号



後期『赤い鳥』を代表する作家新美南吉の『ごん狐』

優良読書グループの歩み (1)

2017年度の「読書週間」に際して各道府県読書推進運動協議会より推薦され、本会において表彰した全国の優良読書グループの活動報告を掲載いたします。
(順不同)

読み聞かせグループ やまびこ

代表者 伊保内恒子
岩手県九戸郡九戸村

〈推薦〉
岩手県読書推進運動協議会

読み聞かせグループやまびこは、村内の子どもたちに村の公民館図書をたくさん読んでもらいたいという5人で2004年8月に発足。今年で13年目を迎えました。現在会員は10人で、A・Bの2班にわかれ交互に活動しています。発足当時、村図書室には子ども向けの本もたくさんありましたが、利用者が少なく、村の教育委員会と話しあい、協力いただきながら、保育園や学校などの訪問をはじめました。また、二戸教育事務所(当時)の先生方にお世話になり、各種研修会などに参加し、活動内容を深めてきました。

訪問はほとんどマイカーを使い、年会費は活動に必要な材料代

などにあてています。研修会など村外に出るときは、村教育委員会との協力をいただいています。

活動場所は、村内幼児施設年6回、子育てサロン年7回、小学校朝読訪問32回、高齢者施設訪問2回、村芸術文化まつり3日間、ブックスタート事業毎月、ラジオFM岩手九戸支局で昔話、村公民館で定期読み聞かせ会年6回、地域行事へ出前活動、いわて民話まつり2回参加、軽米高校・金田一小学



おはなしを語る声をやまびこよによって

校・三陸鉄道列車内で読み聞かせ、金田一温泉民話まつりなど、要請にはほとんど応えています。

研修会などには積極的に参加し、ましようを合言葉に、意欲向上を図っています。また、やまびこ会議として全員集い、報告会や打ちあわせを密にすることで意思疎通を心がけ、ときには会食でさらに交流を深めています。

今後は、おたがいに無理しない、させないという申しあわせをもとに会員を徐々に増やし、私たちにしかできないこと、また、私たちがだからできることを目指し、さらに、地域に根ざした「読み聞かせグループやまびこ」として私たちの声ややまびこのごとく響きわたっていくことを信じ、会員一同心をひとつにして、楽しく活動を楽しみたいと考えております。

読み仲間のか

代表者 吉田カヨ子
富山県高岡市

〈推薦〉
富山県読書推進運動協議会

私たちの読書会は、1980年、子どもの通う中学校のPTA文化活動の一環としてはじまり、

1985年に「読み仲間のか」となりました。「本を読む」魅力にひかれ、毎月第3水曜日に集まっています。読書をおおしての交流は30数年にもなりましたが、メンバーの出入りが何度かあり、現在は6名です。

発足当初は書店で文庫本を買い、課題書としました。夏目漱石・芥川龍之介・森鷗外など近代文学や、現代文学では川端康成・吉村昭・三島由紀夫・白洲正子などにも挑戦しました。なかでも、郷土に関連深い泉鏡花や木崎さと子の作品に親近感を覚えました。最近では図書館の読書活動担当のスタッフが選ぶ本を読んでいます。時流にそった話題性に富むものが多く、そのせいか以前より話しあいが活発になりました。

私たちは、本を読んで話しあうだけでなく、その作者の経歴・作品の時代背景についても調べ、読解を深めています。作家や作品が歴史のなかでどう評価されてきたのか、なぜ世代を超えて読まれてきたのか。いま、私たちが切に願うのは、多くの人の心を支えてきたそれらの小説を、もっと読んでほしいということ。とくに生きづらさに悩む昨今の若い人々にぜひ読んでもらいたいのです。



作者・作品の背景までも踏みこんで一冊を読みあう

当日はランチのあと、ひとりご司会と記録を担当し、各自が読後の感想を述べます。小説としての構成と表現、作者の登場人物に対する視点と世界観など。そして最後には各自が作者のメッセージをどう受け止めたかを発表します。

この充実した2時間は、あつという間に過ぎ、最後はいつもよやま話。老後に直面する私たちの問題は画一的でなくても、悩み、不安がともなうことは避けられない現実です。介護、病氣、金銭のことなど、憂えることが多すぎます。しかし月に一度、読書会の仲間と会い、それらを吐露すること、慰められたり励まされたり。おかげで嘆くことが多い日常をり

セットでき、心が和むのです。これからも、心の糧として読書活動を未長く続けていきたいと思えます。

ゆかいな図書館

代表者 阪口 繁昭
和歌山県橋本市

〈推薦〉
和歌山県読書推進運動協議会

ゆかいな図書館は、ゴミ投棄が目立ち、隠れ喫煙所と化していた駅構内待合所の現状に危機感を抱いた市教委・市議会から、「待合室を簡易図書館に」という声があったのを契機に、1998年、有志を募って設立した。

現在、ゆかいな図書館は、JR橋本駅と密接に連携しながら、15名のボランティアで運営している。年中無休、終日開館で、常駐者はおかず、貸出簿も作っていない。読み終えたら自主返却するシステムである。

蔵書数減少のため、館運営が困難となった時期もあったが、マスコミをとおして「図書不足」を訴え、全国から多くの寄贈本が届けられた。その数は1240件、1万7800冊を超える。ゆかい

な図書館では、そのなかの戦争本500冊を2011年から毎年8月に展示し、戦争の悲惨さと平和の尊さを利用者に訴えている。

利用者のマナーの悪さに閉口したこともあったが、長年の間にずいぶん改善されてきた。高校在学中に図書館を利用した方からの電波時計をはじめ、多くの方から書籍や飾り人形、座布団などが贈られてきた。地元高校図書部はシステムを学ぶ目的も兼ねて来館し、図書整理や清掃を手伝ってくれている。JR橋本駅は、「列車に乗り遅れないように」と、館内に放送設備を設置、駅員の「お薦めコーナー」も設けてくれた。

このような善意にふれるにつ



年末にはみんなで図書館の大掃除も

け、多くの方々への支えのうえに図書館運営が成り立っていることを実感し、これまで活動を続けてきてよかった、としみじみ思う。

図書館を続けるには、信念を貫くこと、会員相互・関係機関との連携を深めることが大事であると考え。会員の高齢化など課題もあるが、「モラルとセルフ」を合言葉に、これからもJR橋本駅や橋本市図書館と連携して、通勤・通学者が気楽に立ちよれる図書館を目指したい。

まつうら図書館

代表者 森 三佐子

長崎県松浦市

〈推薦〉
長崎県読書推進運動協議会

「まつうら図書館きらら塾」は、松浦市立図書館の利用を活性化し、さらに多くの市民に親しまれる市民のための図書館であり続けるよう、見守り育てることを目的に、2011年4月1日に発足しました。公民館、小ホール、会議室、音楽室、和室、調理室などを備えた複合施設「きらら21」のなかの図書館で、たくさんの本と出会い、本をとおして人生を豊か

図書館周辺の施設やテラスを使ったのはなし会も好評!



にしているこうの思いで「きらら塾」という名前でも活動しています。市内で子どもの読書活動に携わっている4つのボランティア団体、地域の文化活動の振興や健全育成運動に関わる会員で構成されています。

定期的な活動として、毎週日曜日に図書館で、職員と4つのボランティア団体との持ち回りで、乳幼児から小学生までを対象に、年齢にあわせて選んだ絵本の読み聞かせ、ことば歌遊び、折り紙遊びなどのリレーおはなし会を行っています。毎回参加する方も多く、子育て中の方には、子育て経験者の会員の助言も大きな励みになっているようです。

一年をとおして、図書館周辺の施設やテラスで、ヨーヨー釣りや肝試し、くじ引きなども盛り込んだ夏の怖いおはなし会、箏の演奏や抹茶を楽しむながらの月夜のおはなし会、図書館を出て各地域で県の天体観測車ビュースターによる星座の観測などの季節を生かした催しや、「サンタさんからお手紙をもらおう」、方言募集、本をテーマにした川柳募集、「こんな町に住みたいな」の絵画募集などの企画、他県の語り部をお招きしておはなし会の開催など、「図書館へ行こう!」と思っていただけよう活動しています。

松浦市立図書館が子どもから高齢者まで、気軽に立ちよれる心のオアシスとなることを願い、そのためにきらら塾がなができるのか、なにをしたらよいかを考え、負いわずゆつたりとやわらかな心で、本との出会いを楽しみながら、今後も活動を続けていきたいと思えます。読み聞かせのスキルの向上、後継者の育成、ほかの読み聞かせボランティア団体との連携も進めていきたいです。

これまでの活動を支えてくださった松浦市立図書館のみならずをはじめ、多くの方々へ感謝申し上げます。



標語決定!



2018 第60回 「こどもの読書週間」 はじまるよ! 本のカーニバル

2018 第72回 「読書週間」 ホッと一息 本と一息

2017年12月15日(金)、公益社団法人 読書推進運動協議会の「こどもの読書週間」および「読書週間」標語選定事業委員会(出席19名)が開催され、「2018 第60回 こどもの読書週間」と「2018 第72回 読書週間」の標語が決定しました。

【第60回 こどもの読書週間 標語】

今回も4月の「読書週間」ポスターイラスト募集時に標語を明示するため、「こどもの読書週間」標語募集と同時に「読書週間」の標語も募集、決定しました。ご応募されたみなさん、社内の応募作をとりまとめいただいた会員各社の担当者のみなさん、ありがとうございました。

60回の記念となる「子どもの読書週間」は標語募集時に荒井良二さんのポスターイラストを公開。イラストをイメージした作品も多くなりました。

第60回「こどもの読書週間」標語の応募総数は、一般・会員各社あわせて1642点。うち32点を選考対象としました。第72回「読書週間」標語の応募総数は1857点。うち463点が選考対象となりました。

子どもの読書週間「標語」「読書週間」標語の順で協議。どちらも、事業委員による数回の投票で作品を絞り、推薦の弁などを加えて、最終的に各委員の一票投票によって、入選作品を決定しました。

今回も4月の「読書週間」ポスターイラスト募集時に標語を明示するため、「こどもの読書週間」標語募集と同時に「読書週間」の標語も募集、決定しました。ご応募されたみなさん、社内の応募作をとりまとめいただいた会員各社の担当者のみなさん、ありがとうございました。

60回の記念となる「子どもの読書週間」は標語募集時に荒井良二さんのポスターイラストを公開。イラストをイメージした作品も多くなりました。

第60回「こどもの読書週間」標語の応募総数は、一般・会員各社あわせて1642点。うち32点を選考対象としました。第72回「読書週間」標語の応募総数は1857点。うち463点が選考対象となりました。

子どもの読書週間「標語」「読書週間」標語の順で協議。どちらも、事業委員による数回の投票で作品を絞り、推薦の弁などを加えて、最終的に各委員の一票投票によって、入選作品を決定しました。

今回も4月の「読書週間」ポスターイラスト募集時に標語を明示するため、「こどもの読書週間」標語募集と同時に「読書週間」の標語も募集、決定しました。ご応募されたみなさん、社内の応募作をとりまとめいただいた会員各社の担当者のみなさん、ありがとうございました。

60回の記念となる「子どもの読書週間」は標語募集時に荒井良二さんのポスターイラストを公開。イラストをイメージした作品も多くなりました。

第60回「こどもの読書週間」標語の応募総数は、一般・会員各社あわせて1642点。うち32点を選考対象としました。第72回「読書週間」標語の応募総数は1857点。うち463点が選考対象となりました。

子どもの読書週間「標語」「読書週間」標語の順で協議。どちらも、事業委員による数回の投票で作品を絞り、推薦の弁などを加えて、最終的に各委員の一票投票によって、入選作品を決定しました。

今回も4月の「読書週間」ポスターイラスト募集時に標語を明示するため、「こどもの読書週間」標語募集と同時に「読書週間」の標語も募集、決定しました。ご応募されたみなさん、社内の応募作をとりまとめいただいた会員各社の担当者のみなさん、ありがとうございました。

60回の記念となる「子どもの読書週間」は標語募集時に荒井良二さんのポスターイラストを公開。イラストをイメージした作品も多くなりました。

事務局報告(12月)

- ・2日〓ひろ美美術館・東京野上彰さん講演会「戦時下の言論統制と絵本」出席
- ・6日〓「新宿区子どもの読書推進委員会」出席
- ☆7日〓「2017年度 決算報告」について朝日税理士法人と打ちあわせ
- ・7日〓児童図書出版協会「年末感謝の会」出席
- ・7日〓大活字文化普及協会「読書権セミナー」出席
- ☆8日〓機関紙「読書推進運動」(60号)発行
- ・11日〓上野の森親子ブックフェスタ 読売新聞社と打ちあわせ
- ・11日〓上野の森親子ブックフェスタ 博報堂と打ちあわせ
- ・12日〓上野の森親子ブックフェスタ 日本書籍出版協会と打ちあわせ
- ・13日〓上野の森親子ブックフェスタ 運営委員会出席
- ・13日〓日本書店商業組合連合会「出版販売年次大観覧」出席
- ☆15日〓「2017年度 全体事業委員会」および「第60回 こどもの読書週間標語選定事業委員会」「第72回 読書週間標語選定事業委員会」開催
- ☆15日〓機関紙「読書推進運動」(61号)発行
- ・15日〓文部科学省「子ども読書の日本スターイラストをとよかすひこさん」より受け取り
- ・18日〓「造本装幀コンクール実行委員会」出席
- ・19日〓上野の森親子ブックフェスタ 日本児童教育振興財団と打ちあわせ
- ・19日〓上野の森親子ブックフェスタ 日本図書普及と打ちあわせ
- ・22日〓上野の森親子ブックフェスタ 大阪屋東田と打ちあわせ
- ・22日〓伊藤忠記念財団と「子ども文庫 助成事業」打ちあわせ
- ・22日〓文部科学省と「子ども読書の日本スター」打ちあわせ
- ・25日〓「図書館を使った調べる学習コンクール」事前審査会出席

編集部 & 事務局の ひとこと

●新年あけましておめでとうございませう。本年もよろしくお願ひいたします。

●1月8日に開催された「第17回 学校図書館・公共図書館の充実を求めるつどい」で、全国の学校図書館に関する情報交流紙「ぼっちわーく」の発行人を務めた梅本恵さんのお話をうかがいました。1993年5月から2017年3月まで刊行された『ぼっちわーく』。創刊時は電話ファックス、郵便での情報収集だったといえます。とくに、1997年の学校図書館法改正時は、電報まで利用しての編集作業だったとか。

●そのころ、私は出版社でアルバイトをしていました。「○○さん(いまや、だれもが知る大ベストセラー作家です)が、原稿をeメールで送るといつています!」の知らせに、「編集部のパソコン(1台しかなかった)では、受信できないぞ!」「だれか、自宅でもいいから受信できるの、ないか!?」と編集部が右往左往する時代でした。

●いまや、この機関紙でも原稿のほとんどをメールでいただく(手書き原稿も大好きです)、DTPソフトを駆使(?)して、紙面を作っています。それでも、巻頭言や特集などをどなたに願ひするかの材料は、新聞や情報誌、いただいた手紙にある近況のご報告であることがほとんどです。通信手段がどれほど発達しても、その礎にあるのは「書かれたもの」と「人」とつながり「な」ですね。書く力、つながる力を身につける一年にしたいと思ひます。(伸)